

Rd.
6

APR 2013

平成25年9月30日発行

RACING PRESS

apan

**SUPER GT ROUND6
FUJI**



Super GT
Series 2013

GT

Round 6
FUJI

9/7-8



Text

鳥村元子

Editor

吉川綱恵

Photo

鉄谷康博

加藤智光

中村佳史

原 勝弘

小澤克仁

Special Thanks

榎原寿雄

Cover Photo

中村佳史

ZENT CERUMO SC430 が待望の今季初勝利!



いよいよ終盤戦に向けて加速が増したSUPER GT。シリーズ第6戦の舞台は、長いメインストレートが特徴の富士スピードウェイ。決勝日の朝は軽く雨が降り、しかしレース直前からは薄日が挿す蒸し暑い天気の中で実施されるという落ち着かない状況であったが、その中でNo.38 ZENT CERUMO SC430(立川祐路/平手晃平組)が文句ナシの速さを見せつけ、待ちわびた今シーズン初優勝を果たすことになった。

前日の予選でも、38号車はダントツの速さを披露していた。レクサスのお膝元でもある富士で立川がポールポジションタイムをマーク。自らのGT500最多ポールポジション獲得回数を16回へと伸ばすこととなった。一方、2位に続いたのは、No.37 KeePer TOM'S SC430(伊藤大輔/アンドレア・カルダレリ組)で、レクサス勢がフロントローを独占した。

決勝日は朝にひと雨降ったことでウェットコンディションのフリー走行となったが、それは一時的なものに終わり、決勝は完全なドライへ。クリアスタートが切れて落とされると、まずはポールスタートの38号車がリード、それに2位スタートの37号車が迫った。だが、途中でセーフティカーがコースインする事態が発生。慌ただしくピット作業がその後執り行われた。

終盤に入っても、なお38号車がトップでレースを牽引。その後方にはリスタートを成功させてポジションアップを果たしていたNo.17 KEIHIN HSV-010(塚越広大/金石年弘組)が迫ったが、逆転までには至らず。38号車が逃げ切り勝利を達成している。



GT500

GT500



2nd



3rd

GT500 決勝結果

| | | | |
|-----|-------|----------------------|-------------------------|
| 優勝 | No.38 | ZENT CERUMO SC430 | 立川祐路 / 平手晃平 |
| 2位 | No.17 | KEIHIN HSV-010 | 塚越広大 / 金石年弘 |
| 3位 | No.37 | KeePer TOM'S SC430 | 伊藤大輔 / アンドレア・カルダレッリ |
| 4位 | No.6 | ENEOS SUSTINA SC430 | 大嶋和也 / 国雄資貴 |
| 5位 | No.18 | ウイダー モデューロ HSV-010 | 山本尚貴 / フレデリック・マコヴィッキキ |
| 6位 | No.12 | カルソニックIMPUL GT-R | 松田次生 / ジョアオ・パオロ・デ・オリベイラ |
| 7位 | No.1 | REITO MOLA GT-R | 本山 哲 / 関口 雄飛 |
| 8位 | No.8 | ARTA HSV-010 | ラルフ・ファーマン / 松浦孝亮 |
| 9位 | No.23 | MOTUL AUTECH GT-R | 柳田真孝 / ロニー・クインタレッリ |
| 10位 | No.24 | D'station ADVAN GT-R | 安田裕信 / ミハエル・クルム |



おまたせ！ GSR 初音ミク BMW が今季初優勝！

今回のポールポジションはNo.55 ARTA CR-Z GT (高木真一/小林崇志組)。搭載したウェイトをもろともせず、今季2度目のポールポジションからスタートを切ったが、レース中のセーフティカーランを味方にしたのは、No.4 GSR初音ミクBMW (谷口信輝/片岡龍也組)。鈴鹿ではトップチェッカーを受けながらも、レース後の再車検で失格になるという苦杯を味わっている。徐々にポジションアップを果たすと、レーススタート後も粘りある走りでもってトップをキープ。後続に大差をつけて、ついに待ちわびたシーズン初優勝を果たすこととなった。



GT300

GT300



GT300 決勝結果

| | | | |
|-----|-------|-----------------------------|-------------------|
| 優勝 | No.4 | GSR 初音ミク BMW | 谷口信輝 / 片岡龍也 |
| 2位 | No.31 | Panasonic apr PRIUS GT | 新田守男 / 嵯峨宏紀 |
| 3位 | No.86 | クリスタルクロコ ランボルギーニ GT3 | 山西康司 / 細川慎弥 |
| 4位 | No.62 | LEON SLS | 黒澤治樹 / 黒澤 翼 |
| 5位 | No.3 | S Road NDDP GT-R | 星野一樹 / 佐々木大樹 |
| 6位 | No.10 | GAINER Rn-SPORTS DIXCEL SLS | 田中哲也 / 植田正幸 |
| 7位 | No.11 | GAINER DIXCEL SLS | 平中克幸 / ビヨン・ビルドハイム |
| 8位 | No.16 | MUGEN CR-Z GT | 武藤英紀 / 中山友貴 |
| 9位 | No.61 | SUBARU BRZ R&D SPORT | 山野哲也 / 佐々木孝太 |
| 10位 | No.52 | OKINAWA-IMP SLS | 竹内浩典 / 土屋武士 |



THE WINNER
CLOSE-UP

No.38 ZENT CERUMO SC430

Text by Motoko Shimamura
Photo: Yasuhiro Tetsutani

不遇が続いていたチームに 吹いた追い風 S-GT最多ポール男が 意地でつかんだシーズン初勝利

今シーズン2度目の戦いを迎えた富士スピードウェイ。夏の残暑がまだ残る中、まず予選で強さを見せたのが、EXUS TEAM ZENT CERUMOの38号車ZENT CERUMO SC430だった。エースは富士マイスターと呼ばれる立川祐路。ポールポジションを獲得、自らが持つGT500最多ポールポジションを16回へと伸ばすことに成功した。

一方で38号車は今シーズン不遇に見舞われる戦いを繰り返していた。トップを走りながらも土壇場で逆転を喰らったり、後続の車両に追突されたり、と珍しいほど不運が重なり、勝機を失う戦いが続いた結果、チャンピオン争いからも遠ざかっていた。だが、得意とする富士でなんとか流れを変えたいと、背水の陣に挑んだ。

チームのエース、立川はレクサスの開発ドライバーを務めるベテラン。安定した速さと鋭ったときの強さを武器にトップドライバーとして君臨。2011年からは欧州でのフォーミュラレース参戦の経験を持つ平手見平と新コンビを結成。昨シーズンはランキング2位に甘んじているだけに今年こそタイトルをと意気込むも、空回りが続いていた。だがようやくこの富士で復調の兆しを見せることに成功したといえる。

レースでも38号車の快走には変わりはなく、一旦、ライバル車に先行を許すも、後半を担当した立川は決して諦めない。絶好のタイミングでライバルを逆転し、トップを奪還。最終盤になって雨がポツリポツリと落ちはじめもの、高い集中力を味方につけて気迫の走りを完遂。ライバルもギリギリ最後まで追い立てたが、ベテラン立川の絶妙な走りに歯が立たず。シャットアウトを喰らった。結果、38号車は長らく待ちわびた今シーズン最初の勝利獲得に成功。一度は諦めかけていたシリーズタイトル獲得の夢が復活することとなった。



Special
Eye



神原寿雄



Photo by: **Hisao Sakakibara**